子どもの信仰成長と教会・家庭の役割

杉本玲子

I. 序論

少子高齢化に対して危機感をもつ教会で、「幼児小学生の子どもたちに継続的な信仰教育をすることによって、次世代の献身者を育てよう」「次世代の子どもたちを育てることは、教会の最重要課題である」のような主張が顕在化しつつある。次世代の子どもたちに対する信仰教育について考える中で、子どもの信仰的成長についての議論を避けて通ることはできないであろう。

子どもたちの全人格的な成長、特に信仰的・霊的成長は、どのような過程をたどるのか。子どもたちのための霊性の教育は可能であり、必要なのだろうか。クリスチャン一世の子どもと、クリスチャンホームで育った二世・三世の子どもの霊的成長には、違いがあるのだろうか。本論文では、「子どもの信仰成長と教会・家庭の役割」をテーマとして、神学的側面、歴史的側面、発達心理学的側面、宗教的社会化、日本の文化的特徴の面から考察を重ね、子どもの信仰育成について考えたい。

II. 信仰的成熟とは―神学的側面―

ヘブル人への手紙5章12節から14節を見ると、「あなたがたは年数からすれば教師になっていなければならないにもかかわらず、神が告げたことばの初歩を、もう一度だれかに教えてもらう必要があります。あなたがたは固い食物ではなく、乳が必要になっています。乳を飲んでいる者はみな、義の教えにつ

うじてはいません。幼子なのです。固い食物は、善と悪を見分ける感覚を経験によって訓練された大人のものです」と書かれている。ここで言う「幼子」とは、生物学的な年齢ではなく、知的、精神的、霊的に未熟で、聖書の基本原則に留まっている状態の人々である。一方、「大人」とは、初歩の教えを習得し、善と悪とを見分ける感覚を経験によって訓練され、霊的に成熟している人々のことを指している。信仰の成熟は、年数によるのでなく、霊的な状態を反映するものとして描写されている[1]。

次にコリント人への手紙第一、2章6節、および3章1–3節を参照すると、ここでも同様に、「キリストにある幼子」と「成熟した人たち」が対比されている。キリストにある幼子とは、信じて年数が短いということでなく、年数にかかわらず、信仰的な価値観が未熟で、肉に属する人、ねたみや争いにとらわれている自己中心な人として描写されている[2]。

さらに、エペソ人への手紙4章 13–15 節を見ると、「私たちはみな、神の御子に対する信仰と知識において一つとなり、一人の成熟した大人となって、キリストの満ち満ちた身丈にまで達するのです。こうして、私たちはもはや子どもではなく、(略) あらゆる点において、かしらであるキリストに向かって成長するのです」とあるが、「大人」というのは、年齢を重ねた人という意味でなく、「キリストの満ち満ちた身丈に近づいているほど、霊的に成熟している存在」という意味で記述されている。これらの聖書箇所は、大人の信仰と子どもの信仰の本質的な違いを描写しているわけではない。

また、コリント人への手紙第一 13 章 11 節でパウロは「私は、幼子であったときには、幼子として話し、幼子として思い、幼子として考えましたが、大人になったとき、幼子のことはやめました」と書いている。彼は、賜物を重視し、愛を軽視しているコリントの教会が信仰的に未熟であると指摘している。さらに、コリント人への手紙第一 14 章 20 節でパウロは、「兄弟たち、考え方において子どもになってはいけません。悪事においては幼子でありなさい。けれども、考え方においては大人になりなさい。」と説いている。「子どもになってはいけません」という戒めは、判断の基準を見かけだけで決めることがないように留意し、周りの人々のことを考慮する思慮深さを持つように勧めているのである。このように新約聖書の書簡においては、すべての人が信仰的に成熟するように勧められているが、「大人の信仰」と「子どもの信仰」が本質的に異なるものとして対比されているわけではない。

さて、これらの書簡に描かれている霊的成熟に関する記述とマタイの福音書の 18 章 3 節の「向きを変えて子どもたちのようにならなければ、決して天の御国に入れません」という主イエスのことばとの整合性は、どのように考えればよいのだろうか。マタイ 18 章 3 節は、人間の力では誰一人神の国に入ることができず、子どものように無力で無価値な存在という謙虚な立場に身を置く者だけに道が開かれる、という意味である。子どもの純粋な信仰がイエスに称賛されていて、大人の信仰が不純であると戒められている、というわけではない。このような解釈は、子どもを美化する傾向のある現代人の読み込みである、と指摘している注解書もある[3]。

III. 子どもの救いと信仰の成熟—歴史的な考察—

では、子どもの救いと信仰の成熟について、歴史的にどのように考えられてきたのか。初代教会以後、最初の数世紀の間、大人が洗礼を受けることが標準であった。そののち、アウグスティヌスは、すべての人はアダムの原罪のもとに生まれてきているので、幼児が罪あるままに死ぬことがないように、誕生後直ちに受洗の必要があるという考え方を述べた。その結果、約 1000 年もの間、幼児洗礼が規範として理解されてきた[4]。宗教改革後、プロテスタントの一部で、幼児期に受洗した大人に対して、再受洗の必要があると主張する人々が再洗礼

[1] 森谷正志『教会・神学校に迫られるパラダイムの転換』(いのちのことば社、2021 年) 197 頁
[2] 森谷『パラダイムの転換』198 頁
[3] 『新実用聖書注解』(いのちのことば社、2008 年) 1322 頁
[4] I・V・カリー『子どもの成長とキリスト教教育』三浦正訳 (日本基督教団出版局、1990 年) 150 頁

派として知られるようになった。彼らは、キリスト教信仰の告白をなしうるのは大人のみであり、大人となった時点で洗礼を受けるべきであると主張した。

18世紀後半から19世紀初頭のメソジスト教会の家庭教育の主流は、早い年代に回心経験をさせようと努めるものだった。当時の欧米の子どもの死亡率の高さから、悔い改めをしないまま子どもが召されることがあれば、地獄の炎で焼かれるかもしれないことを親が不安に思っていたと理解されている。その結果、子どもが幼いうちから、悔い改めて回心し、救いの恵みを受け取ることが、教会教育の主目的と考えられるようになった。リバイバル集会の説教者は、神の義と裁きを強調し、不信仰と罪を糾弾しながら悔い改めを迫り、神に立ち返る決心と意思表示を行動で表すことを求めることが常であった。

このような回心を強調する流れに一石を投じたのが神学者ホレス・ブッシュネルであった。彼は、クリスチャン家庭で育てられている子どもが、罪責感や恐怖に責められて悔い改めて回心するのでなく、神の愛に包まれた家庭の中で信仰が養育されていく日々のプロセスを重視すべきことを主張した。すなわち、劇的な回心経験が重要ではなく、いつどのように信仰決心をしたか明確な自覚がなくても、子どもたちが家庭の中で信仰が養育され、霊的に成長していくことが大切であると説いた。「子どもの年齢にふさわしくそして子どもの年齢に可能な、つまり、子どものための回心があるということが証明される」と述べている[5]。ブッシュネルは、子どもたちに良きクリスチャン（本物のクリスチャン）になるには若すぎる、と教えてはならないこと、また十分に理解できない恐れがある神学的な事柄は、子ども向けにわかりやすいことばに言い換えて教えなければならない、と主張した[6]。

それ以降、子どもの信仰の育成について、回心と信仰成長プロセスについて様々な考察がなされ、議論が積み重ねられてきた。宗教教育学者ジョン・ウェスターホフは、「キリスト教信仰は、その本質において『回心』を必要とし、学校で教えることによって、人を漸進的にキリスト者へと教育することはできない」と主張しながらも、「回心は教育の要素を全く排除し、教育の過程と無関係の出来事ではない。むしろ教育と回心は、全体としてひとつに統一される事柄である」と結論づけた[7]。

[5] H・ブッシュネル『キリスト教養育』森田美千代訳（教文館、2009年）81頁
[6] ブッシュネル『キリスト教養育』375–378頁

IV. 子どもの信仰と発達心理学—発達心理学的検証—

子どもの信仰成長に関する研究では、J・ピアジェやL・コルバーグらの知的道徳的発達の理論に基づいた発達心理学的研究が先行した。宗教的思考力の発達は、基本的にピアジェの3段階の理論に一致するという結果が広く検証されている。ロナルド・ゴールドマンは、聖書物語を用いたインタビュー調査により、宗教的思考力の発達の3段階、前宗教的段階、半宗教的段階、宗教的段階が存在するという結果を発表した[8]。さらにゴールドマンは、聖書の早期教育について警鐘をならし、聖書を中途半端に学んだ子どもは、青年期に至ると聖書を新鮮味のないおとぎ話のように誤解して教会を離れてしまう恐れがあると指摘した。ゴールドマンは、子どもたちが知的に理解できる年齢に達するまで、聖書の抽象的な教えの大部分を教えるのを待つべきであると主張した[9]。

その後、様々な研究を通してゴールドマン理論の検証がなされた。メアリー・ウィルコクスは、人間の心は合理的、論理的、分析的な面だけでなく、創造的、独創的、直感的な面も必要であると指摘し、聖書物語を理解する段階として、創造的、逐語的、伝統的、反射的の四段階があると結論づけた[10]。その他、子どものたとえ話の理解度とその子どもの一般知識、具体的操作思考との関係の調査も実施されたが、聖書を理解するためには、一定の一般的知識と具体的な論理的思考が不可欠であるという結論が得られた。このように聖書理解の視点か

[7] J・H・ウェスターホフ『子どもの信仰と教会』奥田和弘・山内一郎・湯木洋一訳（新教出版社、1981年）75–77頁
[8] Ronald Goldman, *Religious Thinking from Childhood to Adolescence* (New York: The Seabury Press, 1964), 52–62.
[9] Ronald Goldman, *Readiness for Religion: A Basis for Developmental Religious Education* (New York: The Seabury Press, 1965), 41–44.
[10] Mary Wilcox, *Developmental Journey* (Nashville: Abingdon, 1979).

ら見ると、子どもの理解力は年齢とともに段階的に発達するので、発達の枠を超えた「信仰的早期教育」が可能であるという根拠は示唆されていない。

一方、心理学者ディヴィッド・エルカインドは、著書『急がされる子どもたち』の中で、子どもたちが親や学校、メディアやテクノロジーによって成長を急がされた結果として、無益なストレスを経験するだけでなく、反抗的になり、思春期の問題行動として噴き出す危険性があることを指摘した。子どもを急がせて育てることの弊害の一つとして、青少年期になって、親の価値観や信念を信奉するのを止めたことによる心のすきまを埋めるためにカルト集団に走ったり、親とは異なる教会で信仰を持とうとしたりすること等の例が挙げられている[11]。エルカインドの理解では、幼く心の準備ができていない早期に、体系的な聖書知識を教え込もうとすることは、効果がないばかりか、子どもに苦痛を与えてしまいかねない。だからといって、信仰教育を一定の年齢になるまで差し控える必要はなく、宗教的な認識ができなくても、宗教的情操が育まれる時期であるので、乳幼児期から家族で教会に参加し、直感的に信仰体験できる環境を整えることが重要であると主張した[12]。

ウェスターホフは、キリスト教信仰の伝統の中で育まれた子どもの信仰の発達段階を4段階で描写した。すなわち、①体得的信仰（親や先生に習い覚えた信仰）、②群れ信仰（仲間や家族という共同体から受け継いだ信仰）、③探究的信仰（従来の伝統や信仰に疑問を持って、枠を超えて新しい価値観を自分で試し、探し求める信仰）、④自立的信仰（探究の結果、自分を明け渡すことによって与えられた信仰）である。ウェスターホフは、大人でも群れ信仰に留まる人が多いが、探究を経て明け渡しを経験し、自覚的な信仰に至ると指摘している[13]。彼の定義によると、神への明け渡しの行為は、「群れ信仰」に欲求不満を感じ、個人的に意義ある信仰を見つけたいという探究の結果起こるのであって、

[11] ディヴィッド・エルカインド『急がされる子どもたち』戸根由紀恵訳（紀伊国屋書店、2002年）315頁
[12] I・V・カリー『子どもの成長』121–122頁
[13] ウェスターホフ、157–159頁

思春期前には応答できないことが示唆されている。

宗教心理学者ジェームス・ファウラーは、コルバーグの道徳的発達段階をもとに、信仰の発達を普遍化する信仰の観点からとらえようと試みた[14]。ファウラーの信仰発達についての理論は以下の通りである。①直感的・投影的信仰（感情による信仰を基礎として、神秘的意識を内包している信仰）②神話的・字義的信仰（親や教師に言われたことを繰り返す信仰）③総合的・伝統的信仰（家庭や学校・教会・友だちから習得した信仰）④個別的・内省的信仰（周りから習得した信仰でなく、自分の内面を見つめようとする信仰）⑤両極的・弁証法的信仰（個人の信仰と、共同体の伝統的信仰のバランスを取ろうとする信仰）⑥普遍的信仰（完全に統合された信仰）[15]。ファウラーの理解によれば、信仰決心は信仰内容の変化であって、思春期でなくてもいつでも起こりうるし、また以前の信仰に逆戻りすることもあり得る。ファウラーの理論は、信仰的成熟が年齢によらないで、退行や停滞、急成長などの可能性を内包している信仰的歩みの実情とも対応している。

ファウラーは、信仰の決断と発達段階の関わりについて、以下の6つのタイプを示した。①信仰の決断を伴わない発達段階の移行、②段階移行を伴わない信仰決断、③段階移行を促す信仰の決断、④信仰の決断を促す段階の移行、⑤段階移行と同時に起こる信仰の決断、⑥信仰の決断のみで、段階の移行は起こらない[16]。ファウラーは、信仰の決断は価値観の変化であり、劇的な変化以外にも様々なタイプがありうると結論づけた。

同じく宗教心理学者V・ベイリー・グリスピーは、信仰成長を7段階に分けて記述した。①幼児期の「借り物の信仰」、②児童期の「反映されている信仰」、③青年前期の「個人的な信仰」、④青年後期の「確立した信仰」、⑤成人前期の

[14] ファウラーの定義によれば、「信仰」はキリスト教信仰に限定されず、諸宗教や哲学的な神への信頼も含まれる。
[15] James W. Fowler, *Stages of Faith: The Psychology of Human Development and the Quest for Meaning* (San Francisco: Harper & Row, 1981), 122–211. ファウラーによれば、普遍的信仰の域に到達する人は、ほとんどいない。
[16] Fowler, *Stages of Faith*, 285–286.